

(第 51 回 : 2023 年 7 月)

### 家のはなし (海外の住宅事情) ～その 6～

家のはなしも 4 月から 5 回連続で書き続けてきましたので、読者諸氏におかれては少々食傷気味になってきたかもしれませんが、これが最後です。少し長くなりますが我慢してお付き合いください。今回は、インドのニューデリー、そして最後の在勤地となったニューヨークの“家のはなし”です。

#### インドで住居探し

ベルリンで 4 年半の在勤を終え、インドの首都ニューデリーに転勤したのは 2013 年 2 月。ベルリンでは在勤最後の 8 か月間は単身生活、インドでも単身赴任することが決まっていたので、引っ越し荷物は最小限とし、ベルリンのアパートで使用していた家具と家財道具は全て現地で処分し、身軽な赴任となりました (家財道具を処分したことは、インドに着任してから後悔することになるのですが…)

インドは、28 の州と 8 つの連邦政府の直轄領で構成されており、首都ニューデリーはデリー連邦直轄地の一部です。デリーの街は、ムガル帝国に代表されるイスラム・インド当時の都であったオールド・デリーと英国統治下の首都であったニューデリーとで構成されていますが、現在の首都機能はニューデリーに集約されており、インド政府は首都をニューデリーに定めていますので、ここではオールド・デリーも含めたデリー首都圏全体をニューデリーと呼ぶことにします。人口は約 2,200 万人で、首都圏全域の面積は東京都の 7 割程度です。着任してすぐの印象は、街の至るところにやたらと人が多くたむろしているというものでした。

ニューデリーは、外国人が居住するような中高級住宅地とスラムともいえるような貧困地区が複雑に入り組んでおり、住宅地によってはスラムと背中合わせの場所もありますので、住居探しでは住宅地のグレードや利便性に加えて治安面にも考慮の上で居住エリアを絞り込むことが最優先でした。

物件の紹介は、他の在勤地と同様に不動産会社の仲介によります。不動産会社とのアポイントメントには 1 回目こそ大使館のインド人職員が同行してくれますが、英語が公用語の国ということで 2 回目以降は職員の同行はありません。したがって、家を探す本人が不動産会社の担当と直接やり取りをすることになるのですが、発音やイントネーシ

ョン、言い回しなどが独特なインド英語に慣れておらず、相手の言っていることを理解できずに何度も聞き返していたことを思い出します。インド英語に関して言えば、大使館の現地職員の話す英語もヒンディー語訛りはありましたが、彼らは日本人とのコミュニケーションに日常から慣れており分かり易い英語をしゃべってくれており、こちらも不自由は感じなかったのですが、一般のインド人が話す英語ともヒンディー語ともつかないいわゆる“ヒングリッシュ”を理解できるようになるまでにはかなりの時間を要しました。

不動産会社の担当とは大使館で待ち合わせをして、物件のサイトまでは先方の車またはオートリクシャーで向かいます。交通事故が多発しているリクシャーの危険性については、第36回のコラムで書きましたので割愛しますが、家探しをしていた着任直後の当時はリクシャーの危険性を十分認識しておらず、こんなものかと思って何の疑問も感じずに同乗していました。

とにかく、探すエリアを3か所に絞って30件ほどの物件を内覧しましたが、ほとんどが古い物件ばかり。偶に新築物件もありましたが、大使館の職員からは新築物件は電気系統や水道のトラブルが多いので、人が住んだことのある物件を選ぶようアドバイスされていたため、要望に合う物件がなかなかありませんでした。当時の賃貸住宅市場は、需要に供給が追いついていない状況で物件は払底していました。妥協の産物として選択したのは、大使館員が多く住むバサント・ビハールという地区の4階建てビルの4階にあった3ベッドルーム、家賃月額14万ルピー（当時のレートで約28万円）の家具なしアパートでした。何の変哲もない住居でしたので、間取りの詳細は割愛しますが、家具の調達をどうするかが問題でした。まともな家具を揃えとなると相当の出費を強いられますが、当時は日本の家族への仕送りも必要でしたので家具に多額に費用をかけるわけにもいかず、こんなことならドイツで使用していた家具を処分せずに船便で運んで来ればよかったと後悔したものです。熟考の末、家具を家主負担で購入、その分を家賃に上乗せして入居、という交渉を行った末に入居の運びとなりました。交渉は、アパートのオーナーがインド航空国際線の現役CAで、日本へのフライトを何度も経験しているなどで日本人に好意的だったことから、スムーズに運びました。ただし、家具代として家賃に上乗せした2万ルピー（約4万円）の毎月の追加出費は、後々までボディブローのように効いてくることになりましたが…

## 住居のトラブル

アパートの築年数は覚えていませんが、おそらく40年以上は経っていたと思います。古い上にメンテナンスも十分に行われていたのか怪しい建物でしたから、何度かトラブルにも遭いました。日常的なトラブルで大きかったのは、水の供給です。水道水は、一旦アパートビル屋上に設置してある給水塔に汲み上げられ、そこから各住戸に給水されますが、給水塔が必ずしも満水になっているわけではなく、水の出ない日も頻繁にあり

ました。その上、気温が 47°Cにも達する真夏には給水塔の中は温水になっています。また、筆者の部屋は 4 階建ての 4 階にありましたので屋上からの水圧が極めて低く、シャワーの水（時に温水）もチョロチョロとしか給水されず、日々のストレスになっていました。水の出が悪いことから、トイレの使用前にはタンクに水が溜まっていることを確認してから使用するなど、かなり気を使っていた覚えがあります。水質もひどく飲料水には全く適しません。浄水器の設置は必須で、カートリッジのフィルターは 1 か月も使用すると真っ黒になります。おそらく、バクテリアなどもかなりのレベルで混じっていたのではないかと思います。浄水器を通した水も、料理に使用する際には必ず煮沸していました。飲料水は市販のミネラルウォーター、生野菜も一切口にしないなど、水の衛生問題には気を遣っていたつもりになっていましたが、それでも月に 1~2 度は必ずと言っていいほどお腹を壊し下痢症状に悩まされ続けました。

さらに、電力の供給も問題でした。当時ニューデリーでは恒常的かつ頻繁に停電が発生していました。電力の供給不足からくる計画停電だと聞いたことがあります。エリア内の住宅ビルがエアコンを使用している真夏に停電が多かった記憶があります。日本大使館では、各館員に対し重油を燃料とする大型の発電機を貸与しており、夏の猛暑日でも館員のアパートでエアコンや冷蔵庫が停止することのないよう対策が取られていました。他方、アパートビル自体には発電機がなく、停電の都度エレベータが停止していましたが、フロアの途中で停止したエレベータ内に閉じ込められたことが 3 回もあり、その都度非常ベルを鳴らしてアパートの警備員を呼び、手動でドアを開けて最寄りの階に這い上がった記憶があります。今思い返しても、事故にならなかったことが不思議なくらいでした。

鳩の糞害も困りものでした。狭いベランダに、雨でも降らない限り何 10 羽という数の鳩が集まっては所かまわず糞をまき散らし極めて不潔な状態。その上、「ポー、ポー」という鳴き声が耳について休日もゆっくり寝ていただけませんでした。オーナーに対し、インターネットで調べた鳩の撃退方法をいくつか進言し、対策もとってもらいましたが、アパートを退去するまで改善されないままでした。トラウマというわけでもないですが、今でも鳩の鳴き声を聞くとニューデリー当時に悩まされたことを思い出してしまいます。

住居の付近を牛が徘徊しているのも困りものでした。ヒンドゥー教の国インドでは、牛は神聖な生き物ですが、アパートの通りを挟んだ斜め向かいにコンテナを改造したゴミ捨て場があり、生ゴミから缶、瓶、プラスチックなどあらゆる生活ゴミが分別されることなく捨てられ、そのゴミ置き場に数頭の牛が毎日のようにどこからか集まってきては、ゴミを漁っていました。ゴミ置き場の匂いもさることながら、牛が食い散らかした生ごみが通りに散乱して汚いことこの上なく、かといって誰も牛を追い払おうとはしません。神聖な生き物が生ゴミ漁りとはと、ため息をつきたくなるような日々でした。

水や電気の問題は、筆者だけのトラブルというわけではなく他の大使館員も同様で、当時からエマージング・カントリーあるいは BRICS（最近ではグローバル・サウスと呼

ばれていますが)の一角としてそのポテンシャルを期待され続けているインドですが、こと基礎的なインフラに関しては、当時はまだまだ十分に整備されていないという印象でした。

## インドからニューヨークへ

ニューデリーからニューヨーク(NY)に転勤したのは、クリスマスも間近に迫った2015年12月半ばのこと。カナダのモントリオール以来、約30年ぶりの北米大陸での勤務です。インドでは、ビザ発給や邦人援護など恒常的に多忙だった上に、私生活でも不便な単身赴任、トラブルの多いアパート生活、日本食の調達もままならないなど、何かとストレスの多い在勤でしたので、出発の機内に乗り込んだ時にはインド生活から漸く解放されたという思いでホッと、すぐに眠り込んでしまいました。ニューデリーからNYまでは、成田経由で乗り継ぎ時間もいれると約20時間の長時間フライトでしたが、疲れよりも解放感が勝っていたように思います。

NYに到着すると、まずマンハッタンのグランドセントラル・ステーションから徒歩数分の長期滞在者用サービスアパートにチェックイン(結局、ここにはアパートに入居するまで約1か月半滞在)。荷物を下ろすや、早速総領事館に向かいました。例年ですと、12月は邦人社会や日系人社会のイベントが目白押し、さらに在外公館では天皇誕生日祝賀レセプションが開催されるため1年のうちでも最も忙しい月ですが、着任時にはほとんどのイベントが終了して館員の半数近くは既に休暇で不在という状況。一方、当方は管轄地域に9万人近い在留邦人がいる総領事館領事部の責任者ということで、多少の緊張を伴って初出勤したのですが、総領事館内は閑散としていてのんびりムードが漂っており、少し拍子抜けしてしまいました。

インドでは単身赴任でしたが、NYでは家内が合流する予定になっていましたので、本格的な家探しは年明けに家内が到着してからということになり、それまでに街の様子を観察しておこうということで、クリスマスと年末年始の休暇は気温零下という寒さも厭わず市内の散策に費やしました。

## マンハッタン

マンハッタンは、NY市を構成する5つの行政区の一つで、東西約4km、南北約20kmの細長い島です。島の東西をイーストリバーとハドソン川が流れ、東のイーストリバーの対岸はクィーンズ区及びブルックリン区、北端の対岸がブルクス区、西のハドソン川対岸はニュージャージー州、南端の対岸がスタテンアイランド区という位置関係になっています。NYといえばマンハッタンをイメージさせるほど、マンハッタンはNYの代名詞となっています。マンハッタンは地域が大まかに3分割され、島の中央部に位置するセントラルパークの南端を走る59丁目より北側がアップタウン、59丁目と14丁

目の間がミッドタウン、14丁目より南側がダウントウンとなっています。さらに細分化すると、セントラルパークの北端にある110丁目より北側がハーレム地区、セントラルパークの東側がアップパーイーストサイド、西側がアップパーウェストサイドで、この2つの地区はいずれもコンドミニアムや高級アパートなどのビルが並ぶ住宅街です。因みに、かつて元ビートルズのジョン・レノンが居住し、最後に殺害された現場にもなったダコタ・ハウス (Dakota Apartment) はアップパーウェストサイド72丁目にあります。ミッドタウンは、14丁目まで南北に走る5番街を境にして、東がミッドタウンイースト、西がミッドタウンウェストと呼ばれており、この一帯がオフィス街であり商業地区でもあります。ダウントウンには、グリニッチビレッジ、ソーホー、イーストビレッジなど新しい文化の発信地となっている地域があり、最南端はウォールストリートを中心とする金融街、さらに最近では9.11テロによって破壊されたワールドトレードセンタービルの跡地が再開発され、巨大なショッピングセンターがいくつもオープンしています。

いわゆる摩天楼を形成する高層ビル群は、ミッドタウンと南端のウォールストリート周辺に集中していますが、基本的にはマンハッタン島全体が高層、中層、低層のビルで埋め尽くされており、その中にはコンドミニアムやアパートのビルも全域に亘って点在しています。特に、ミッドタウンでは高層のオフィスビルに交じって、30階から50階建てのコンドミニアムや賃貸アパートビルが至るところにあります。読者諸氏も映像や写真で目にしたことがあると思いますが、ハドソン川やイーストリバーの対岸から見たマンハッタンの高層ビル群の遠景は圧巻です。

## 住居探し

NYは外務省生活で最後の在勤地となりましたが、子供たちは日本で学生生活ということで、初めて夫婦だけで海外生活を送ることになりました。住居選びでは、子供のいない生活であえて郊外に探す必要もなく、地域はマンハッタン一択に絞り込みました。

NY市における住居探しは、これまでの在外生活の中でも最も労力を必要としないものでした。現地には日系の不動産会社は何社もあり、賃貸住宅だけでなく分譲物件も含め全米で手広く展開している大手の日系不動産会社、NY州を中心に地元で根差して活動している地場の日系不動産会社など、各社しのぎを削っている状況で、どの不動産会社を選択してもハズレはないと言われていました。もちろん、業者によって得意とする地域があり、マンハッタン、ブルックリン、クィーンズ等の都市部で探したいのか郊外を希望するかによって、不動産会社を選ぶことになります。

ということで、不動産会社はマンハッタンの物件を多く取り扱っている日系大手に決め、正月明けに日本から合流した家内とともに住居探しが始まりました。マンハッタンの物件はピンからキリまであり、上を見れば“超”が3つもつきそうな家賃月額数万ドルという高級コンドミニアムもありますが、通常、総領事館員や企業の駐在員などの場

合は賃貸専門アパートの物件を探すのが一般的です。家具なしアパートが基本で、間取りはステュディオと呼ばれるいわゆるワンルームタイプから 3 ベッドルームタイプまであり、この中から自分の予算に見合う物件を探すことになります。当時のマンハッタンの家賃月額相場は、地域にもよりますがステュディオが 2,500~3,500 ドル、1 ベッドルームが 3,500~5,000 ドル、2 ベッドルームが 5,000~7,000 ドル、3 ベッドルームが 7,000~9,000 ドルほどと、ベッドルームが 1 室増えるごとに 1,500~2,000 ドル程度相場が上がるという具合でした。

不動産会社には、予め当方の予算と希望間取りを伝えて候補物件を複数ピックアップしてもらい、1 日で 5~6 物件を内覧するスケジュール。地域は、緊急時にも即座に出勤できる場所ということ为前提に、総領事館（ミッドタウンイーストのパークアベニュー）から徒歩 30 分以内のミッドタウンイースト及びミッドタウンウェストに絞り込み、間取りは予算との関係から 2 ベッドルームまでと決めて 20 軒ほど内覧しました。様々な物件を巡った感想はと言えば、間取りや内装の設備に大きな差異はなく、違いがあるとすれば立地、建物の築年数、部屋の階層だったように思いますが、一定の価格帯で探すとなると、築年数が新しい建物は立地が不便、立地の良い建物では築年数が古い、或いは低層階の部屋（一般に高層階なるほど家賃は高い）といった状況で、物件選択では何を優先するかが重要でした。

## 大都会の真ん中の中層アパート

最終的には、ミッドタウンウェスト 38 丁目に手ごろな物件が見つかり入居を決めました。職場までは徒歩 25 分、タイムズスクエアまで 10 分という好立地で、物件は比較的築年数の浅い中層 26 階建てビルの 16 階にあった 2 ベッドルーム、広さが 120 m<sup>2</sup>の家具なし。家賃は月額 6,000 ドル（当時のレートで約 70 万円）。家賃は、住居手当という名目で総領事館から 90%ほどの補助があり月末に支給、保証金（Security Deposit: 日本の敷金に相当し家賃 1 か月分）は自己負担で退去時に返却される仕組みでしたので、不動産会社への手数料も含めると入居時には一時的に 2 万ドルほど必要で、この資金の捻出には苦労させられました。

アパートは、各部屋全てが北側に面し、リビングダイニングキッチンを挟んで両サイドにベッドルームが横長に連なる形状で、リビング、ベッドルームともに大きな窓が切られて、北向きながらも明るく開放的な雰囲気でした。ベッドルームにはそれぞれバスルームが付帯、キッチンには冷蔵庫、ビルトインの電子レンジ、ガスオーブン、大型のディッシュウォッシャーが標準装備されている他、洗濯機と乾燥機も完備され、夫婦 2 人の住まいとしては十分満足できる広さと設備でした。アパートビルには、正面入り口にドアマンが 24 時間常駐しておりセキュリティは万全。また、住人専用のプールやサウナが付帯したトレーニングジムも併設され、良心的な価格で利用が可能だったことは、インドで鈍った体を動かすのにもってこいの環境でした。

アパートへの入居に必要な家具類の調達は、ベッドとダイニングセットを専門業者からレンタル、その他の家具や照明器具等は例によって“IKEA”で購入といった具合で、漸く入居したのが2月初旬でした。入居してみると、居室からは38丁目の通りを挟んで向かい側に古い20階建てのビルが眼前に迫って見えることに気がりましたが、それでも圧迫感を感じるほどではありません。アパートの自室は高層階ではなかったものの、リビングの窓から目に入る景色は北東側にニューヨークタイムズのビル、北西に目をやれば遠くハドソン川を臨むこともでき、マンハッタンに住んでいることが実感できました。

NYでは、長い海外在勤生活で初めて車を持たない生活をするようになりました。マンハッタンは、地下鉄及びバスの路線が充実しており、日常生活では必ずしも車を所有する必要はありません。むしろ、高額な駐車場料金（月額500～600ドル）、恒常的な交通渋滞を考慮すれば車を所有するのは却って不経済です。ということで、日常の移動の基本は徒歩または公共交通機関でしたが、アパートの近所には大型スーパーが複数あり、食肉、鮮魚、青果の専門店、日用品の雑貨店が徒歩10分圏内に何店舗もあって買い物にも不自由はなく、職場への通勤ももちろん徒歩です。とにかく、NYでは日々よく歩きました。ニューヨーカーにいたってはさらによく歩きますが、オフィス街を闊歩する彼ら彼女らの歩くスピードたるや、まるで競歩のような足取り。ニューヨーカーに感化されたのか、筆者もいつの間にか速足で歩く習慣が身につけていました。帰国した現在でも、速足のウォーキングは日課になっています。

## まとめ

9か所29年間の海外生活で15の住居に暮らしましたが、我ながらよくもこんなに何度も「引っ越し」ができたものだと感心します。新たな在勤地では、住居を決めた時などは「ここから新たな生活が始まる」という思いで毎回ワクワクしたものです。家の歴史は家族の歴史でもあり、いずれの在勤地の住居もその当時暮らした家族の状況とともに鮮明な記憶として残っています。

また、「引っ越し」は贅肉のついた生活をスリムにする作業でもあり、国が変わる都度大量の荷物整理に追われ、多くのモノを処分することにもなりました。おかげで、シンプルな生活が習慣付いたように思います。我が家のモットー（つまり家内のモットーですが）は、「モノを1つ買ったなら1つ捨てる」というものです。NYを離任する際にも大量にモノを処分しましたが、帰国後4年も経つとかなりモノが増えてきました。そろそろ、家の整理を行う時期かもしれません。

おわり

(公財) 栃木県国際交流協会 参与 石塚勇人 (略歴)

1977年外務省入省。外務本省では主に経済協力局、国際協力局で途上国の開発協力を担当。海外勤務歴は、在イスラエル大使館に始まり、在アンカレッジ総領事館、在モントリオール総領事館、在連合王国(英国)大使館、在南アフリカ大使館、在ギリシャ大使館、在ドイツ大使館、在インド大使館、在ニューヨーク総領事館の9公館で計29年間。ギリシャ、ドイツ、インドの各大使館で領事班長を歴任。在ニューヨーク総領事館領事部長を最後に2019年3月退官。同年5月より現職。